

## 書評 佐伯尤著『南アフリカ金鉱業史 -- ラント金 鉱発見から第二次世界大戦勃発まで』

著者	西浦 昭雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	45
号	3
ページ	90-94
発行年	2004-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007715">http://hdl.handle.net/2344/00007715</a>

佐伯尤著

『南アフリカ金鉱業史 ラ  
ント金鉱発見から第二次世界大戦  
勃発まで 』

新評論 2003年 v + 336ページ

にし 浦 昭 雄

著者は、長年にわたり一貫して南アフリカ（以下、南アと略す）の金鉱業に焦点をあてた研究をしてきた。本書はその研究の集大成ともいえる力作で、著者が発表した論文を読むことで南ア金鉱業史の理解を深めてきた評者ら後進にとっては待望の一書でもある。

南ア経済は豊富な鉱物資源を基盤に発達してきたということは広く認識されている。「南アフリカは1900年代半ば以降現在にいたるまで世界最大の産金国であり」（1ページ）、南アの社会経済史における金鉱業の存在は極めて大きい。20世紀の南アを特徴づけるアパルトヘイトの淵源も金鉱業と密接にかかわっている。にもかかわらず、南ア金鉱業を通史的にまとめた日本語書籍はこれまで発刊されてこなかった。したがって本書はその空白部分を埋めるという意義をもつ。

本書の課題は、タイトルが示すとおり「ウィトワータースラントでの金鉱発見から第二次世界大戦勃発までの、約半世紀にわたる南ア金鉱業史を探求することにある」（1ページ）。つまり、本書はトランスヴァール南部で金鉱脈が発見された1886年から1938年ごろまでの約半世紀間における、現在の南アフリカ共和国にあたる地域の金鉱業を対象としている。著者は南アの金鉱業史を研究対象とする意義を、(1)産金国としての世界経済における特異な地位、(2)南ア経済の産業化・資本主義化の主導産業、(3)金鉱業

で確立され、アパルトヘイトの要となる人種差別的権威主義的労働システムにあると指摘している。次に著者は南ア金鉱業史を、第1期（1886年から第2次世界大戦勃発まで）、第2期（1939年から70年まで）、第3期（71年以降今日まで）に分類している。本書の対象時期を第1期に限定した理由について著者は、この時期に経営形態、金融方式、開発・抽出技術、アフリカ人労働者への抑圧的支配など、南ア金鉱業の骨格と性格が確立されたことによると説明している。著者は分析視角として、鉱業金融商會を金鉱業資本の担い手として把握することと、金鉱業と国家の関係について留意したことをあげており、それが本書の特徴にもなっている。

さて、本書は1986年から2002年までに順次発表された4論文を2部6章に再構成してまとめている。本書の構成は以下のとおりである。第1章が本書の総論的な役割を担い、第2章以降が各論的な位置づけとなっている。

## はじめに 研究対象と分析視角

## 第 部 金鉱業の展開

## 第1章 金鉱山開発と鉱業金融商會

## 第2章 鉱業金融商會とグループ・システム

## 第3章 金鉱業と外国資本

## 第4章 ロスチャイルド、南ア金鉱業主と南ア戦争

## 第 部 金鉱業における人種差別的出稼ぎ労働システム的确立

## 第5章 アフリカ人低賃金出稼ぎ労働者モノブソニーの模索と確立

## 第6章 白人労働者とジョブ・カラーバーあとがき

第 部は、鉱業金融商會を中心とする金鉱山開発の展開を概観している。第1章では本書が対象とする1886年から第2次世界大戦勃発までの期間をさらに4時期に細分化し、1節ずつあてている。各節の見出しがその時期の金鉱山開発を端的に表しているので紹介すると、第1節：露頭鉱山開発から深層鉱

山開発への移行（1886～1899年）、第2節：低品位鉱業としての確立（1902～1910年）、第3節：労働過程再編成とFar East Rand金鉱地への重心移動（1910～1932年）、第4節：金本位制度崩壊による金鉱業ブーム（1933～1938年）である。

ウィットワータースラント（以下、ラントと略する）の金鉱脈は膨大かつ規則的に賦存していたが、極めて低品位であった。この地質学的特徴が、資本集約的であると同時に労働集約的というラント金鉱業の性格に決定的な影響を及ぼしたと著者は指摘する。つまり、一方では深層鉱山開発のためには精巧な大型の機械・装置の設置を必要とし、巨額の資本をヨーロッパから導入しなければならなかった。そこでダイヤモンド開発の成功で資本と技術を有するキンバリーの大資本家たちは、持株会社の一種である鉱業金融商會を組織した。鉱業金融商會は外国資本を集める受け皿として機能するとともに、傘下鉱山各社に対して発起・株式発行、金融、管理・支配を集中的に行うグループ・システムを採用した。結局のところ、少数の鉱業金融商會がラントの金鉱業を支配することになる。

他方で、ラント金鉱山は安価で大量の労働力を必要とした。機械、装置、資材は輸入品であり、白人労働者の賃金を引き下げることが困難であったために、コストの低下をアフリカ人労働者の賃金引下げに求めた。そこで安価で大量のアフリカ人労働力の獲得を目指して、鉱山相互の協力や労働者の盗み合いをもたらした。著者によれば、トランスヴァールのクルーガー政権がアフリカ人労働者の創出と確保を十分にできなかったことが、南アフリカ戦争を惹き起こす主要な原因となったのである。

第2章では、南ア鉱業にみられる独特な経営方式であるグループ・システムに焦点をあて、グループ・システムを導入した動機や開発金融様式について考察している。ラント・マインズ（Rand Mines）社は1893年に南ア最初の鉱業金融商會として設立された。当時、深層鉱山の開発のために巨額の資本を必要としたが、1889年の金鉱株ブーム崩壊後、ヨーロッパの一般投資家は金鉱株を回避し、銀行家や金融業者も鉱山投資の投機性を嫌っていた。そこで考案

されたのが、高収益と低リスクを約束する企業形態である鉱業金融商會であった。つまり、生産鉱山会社を単一の統制下におくことで低コストを実現し、高収益をもたらすことができる。さらに複数の鉱山会社の株式を支配することで個々の鉱山会社に対する投資に比べて危険を分散できる。著者は南ア鉱業におけるグループ・システムについて、「鉱業金融商會が、金鉱地独占を基礎に生産コストを最小にして利潤の極大化をはかる、資本と技術者の稀少な南アフリカに適合的な経営方式であった」（112ページ）と結論づけている。

本章では、鉱業金融商會の資本蓄積様式を詳細に分析している。それによると、1890年代には鉱山会社の設立の際に取得した売主株の売却収益など株式売却収益が全収益の圧倒的部分を占めていた。1900年以降第2次世界大戦までの時期では、証券売却収益にもまして、金鉱山会社からの配当収益が商會収益の中心となった。第2次世界大戦以降では、配当収益とならんで手数料収益が中心的収益源になるのである。

第3章では、ラントの金鉱業に投下された資本の規模とそれらの資本の投資国について分析している。1887年から1936年までの50年間におけるラント金鉱山に対する投資額2億5000万ポンドのうち、営業資本募集のための株式発行が56%、売主発行と利潤からの再投資がそれぞれ20%前後、社債が4%を占めたと推計されている。著者は、投資に関する諸研究を検討した結果、1900～13年の期間においてはCGFSA社とJCI社の両鉱山グループではイギリス資本による投資が圧倒的であったこと、コーナーハウス鉱山グループではイギリス資本とならんでフランス資本もかなりの部分を占めていたこと、GM社とゲルツ商會の両鉱山グループにおいてはドイツ資本が大部分を握っていたことを指摘している。興味深いのはセシル・ローズらによって設立されたCGFSA社が、南アフリカ戦争以降、株式の分散化が進展するなかで大株主以外の人物によって取締役が占められるようになり、1910年には「所有と経営の分離」がほぼ完成したことである。

第1次世界大戦後には、ドイツ人所有の金鉱株が

各当該会社によって買い戻されたり、ヨーロッパから流入してきた大量の金鉱株が南ア人によって購入されたりしたこと、さらには南ア登録のアングロ・アメリカン（Anglo American）社やアングロヴァール（Anglovaal）社といった鉱業金融商会在設立されたことにより南ア資本の割合が増加した。ラント金鉱山の株式合計のうち南ア資本が占める割合は1914年の14.5%から35年には40%強へと増加した。

第4章では、ロスチャイルドと南ア金鉱業主はどのような関係にあったのか、南ア金鉱業に対するロスチャイルドの利害はどのようなものであったのか、南アフリカ戦争はどうして惹き起こされたのかといった課題に対して、ロスチャイルドによる南ア金鉱業支配を主張したホブソン（J. A. Hobson）から始まる膨大な諸研究を整理している。先行研究に批判的検討を加えた著者は、「ロスチャイルドなど金融業者は、少なからぬ金鉱株を所有し、また、金鉱山会社の発起にも携わったけれども、南ア金鉱業全体の規模からすれば、マージナルなものであったと断じざるをえない」（177ページ）と述べたうえで、ロスチャイルドが南ア新産金の精練と販売の面において力をもっていたことを指摘している。さらに南アフリカ戦争との関係については、「ロスチャイルドには南ア戦争を支持する十分な理由があり、かつ、金融における彼の地位からしてイギリスの対南アフリカ政策にも大きな影響を及ぼしえた」（209ページ）と結論している。

第部では、アフリカ人労働者に対する金鉱業主と国家の労働政策の展開に焦点をあてている。第5章は、アフリカ人労働者確保のための、鉱業金融商会間の協力と対立、および金鉱業主の国家労働政策への依存を検討しながら、アフリカ労働者モノブソニー（買手独占）の確立過程を説明している。鉱山開発は大量のアフリカ人労働者を必要としたが、アフリカ人労働力需要は供給を上回ることが常であった。したがって、アフリカ人労働者獲得をめぐる鉱業金融商会間、鉱山間、募集員間の競争は激化していく。そこで金鉱業主は、一方で相互に協力して賃金の引下げを実施するとともに、募集の一元化をはかりながらモザンビークでの労働者のリクルート

活動を活発化させていった。さらに他方では、金鉱業主は政府を動かしてアフリカ人労働者の創出と移動規制を実施したのである。トランスヴァール議会は1895年に「特別パス法」を通過させ、アフリカ人が「労働地区」に入る際にはパスの携帯を義務づけた。金鉱業主間の一元的募集体制がようやく確立するのは1920年になってからのことである。

南アフリカ戦争終結後にイギリス総督ミルナー（A. Milner）は、中国人年季労働者の導入に踏み切った。1905年から1907年にかけては、中国人労働者が非白人労働者に占める割合は30%を超えた。白人労働者の憂慮を取り除くため、熟練労働からアジア人労働者を排除する制限が規定された。中国人労働者の「輸入」は数年で取りやめることになるのだが、これら中国人労働者に対する職種制限が、後に南アにおける「永久的な」人種差別的賃金ならびにジョブ・カラーバー（人種の職種差別）の確立に貢献し、アフリカ人労働者の職種移動に不利に作用することになる。

最後の第6章では、南ア金鉱業におけるジョブ・カラーバーの形成過程をまとめている。南ア金鉱業は開発当初から高度な熟練労働と大量の不熟練労働を必要とした。開発当初、技術力の格差から熟練労働は白人が行い、不熟練労働はアフリカ人が担った。その後、白人労働者の「脱技能化」とアフリカ人労働者の熟練度の向上がみられたにもかかわらず、多くの白人労働者は法的および慣習的ジョブ・カラーバーに依存して自己の地位を守るようになっていった。さらに南アフリカ連邦成立直後に制定された鉱山・仕事法（1911年）のもとに公布された鉱業規制において、以前から実施されてきたジョブ・カラーバーが継続された。1924年の総選挙によって、金鉱業主が支持した南アフリカ党が敗れ、新たに成立した国民党と労働党の連立政権は鉱山・仕事修正法（26年）のもと、70年代まで存続する人種差別的出稼ぎ労働システムを確立させたのである。

本書は、金鉱業史を通じて南ア経済の発展過程を

説明している。また、これまで政治的な動機が強調されることが多かったアパルトヘイトの形成について、経済的動機に焦点をあてている。人種差別的労働システムの確立と金鉱業の関係も詳述されており南ア労働政策史としても読みごたえがある。

本書の意義をもう少し細かくみていこう。まず、従来の研究においては触れられることが少なかったウェルナー・バイト (Wernher, Beit & Co.), エックシュタイン (H. Eckstein & Co.) 両商会からのラント・マイنز社への資産譲渡について明らかにしている (53ページ)。次に、第2章では鉱業金融商会による資本蓄積様式について分析しているが、金鉱業の発展を収益構造の変化から読み取れ、示唆に富む分析となっている。とくに傘下鉱山からの手数料収入が増加した要因として、著者が「傘下巨大鉱山数の増加と1908年の金法 (gold law) の改定によって導入された採鉱権賃与制並びに1936年の税率改訂にあった」(109ページ)としている点は鋭い。さらに、20世紀初頭に導入された中国人年季労働者への職種制限が、後のジョブ・カラーパーへと「悪用」されていく点は興味深い。

しかしながら、評者にとって不満が残る箇所も若干ある。第1に、資料紹介にいささか偏ってしまっている点である。とくに第5章と第6章では、数ページにわたってひとつの文献に記述の大半を負う箇所が目立つ。しかもその文献への批判的検証がなされていない。資料の制約があるにせよ、その文献の位置づけをしたり、著者なりの見解を示したりすることができたのではないだろうか。

第2に、少々難解な専門用語が説明なしに登場する場面がある。例えば、アマルガム法 (22ページ)、機能会社 (68ページ)、アッシュクロフト法 (167ページ)、労働輸入協会 (228ページ)、ゴールデン・ブランケット法 (304ページ) など。「金鉱業史」ということもあり専門的な記述が多くなるのはやむをえないとしても、脚注で解説を加えると一般読者向けに親切的な記述になったかと思う。

第3に、鉱業と製造業の関係についての記述が欲しかった。著者は「はじめに」で金鉱業が南ア産業化の「牽引者」であることを強調し、「外貨の稼ぎ

手」として製造業の発展に必要な機械や技術の輸入を可能にしたことや農業と製造業に「市場」を提供したことを述べているが、本文には鉱業と製造業の関係を示す記述はほとんどない。本書の対象範囲である1930年代は南ア経済史において一大転換点だといわれる。製造業が急成長を達成し、1943年からはGDPでは製造業が鉱業を抜いている。この時期、鉱業から派生した鉄鋼業が確立し、南ア製造業の基盤となった。南アの工業化にとっては鉱業と製造業の関係を明らかにすることが重要である。

第4に、同書の対象時期は1886年から1938年までであるが、記述が前半部分に偏りがちになっており南ア金鉱業の「通史」を目指した著者の試みが十分に達成されたとはいえない。例えば、1917年に設立され、30年代には南ア最大の鉱業金融商会へと成長するアングロ・アメリカン社の形成・成長過程に関する記述が他の鉱業金融商会と比べても少ない。広く知られているように同社は南ア経済を象徴する存在にまで成長していく。第3章で、金鉱業と外国資本との関係について説明しているが、「資本の南ア化」について明らかにすることは、南ア経済史や金鉱業史にとって意義があるように思える。

もっとも、評者の第3と第4の指摘は、本書の続編に期待する方が賢明であるだろう。なぜなら、著者はすでに文献リストに掲げているような論文を所属大学の研究紀要に発表しているからである。なお、著者が参考文献にあげなかったもので比較的近年に発行されたものを紹介する。まず、鉱山会議所 (Chamber of Mines) の歴史についてはLang (1986) が詳しい。また、GM (後のGencor) 社の社史としてはJones (1995) が、CGFSA 社の社史としてはJohnson (1987) がある。南アフリカ戦争と金鉱業主との関係については竹内 (2003) が2つの章をさいて検討している。

以上のように若干のコメントを述べてきたが、いずれも些細で本書の意義を揺るがすものではないと思われる。南ア社会経済史の理解を深めるうえで本書が幅広く読まれることを望む。

文献リスト

日本語文献

- 佐伯尤 1990. 「南アフリカにおける新金鉱地の発見と鉱業金融商会 1930年代～60年代」(1),(2),(3)『経済系』第162集(1月),第164集(7月),第165集(10月).
- 1994 97. 「南ア鉱業金融商会の再編成 1940年～1975年」(1),(2),(3),(4),(5)『経済系』第180集(1994年7月),第181集(1994年10月),第182集(1995年1月),第190集(1997年1月),第192集(1997年7月).
- 1994 99. 「南ア金鉱業の新展開 1930～70年」(1),(2),(3)『経済系』第178集(1994年1月),第193集(1997年10月),第198集(1999年1月).

竹内幸雄 2003. 『自由貿易主義と大英帝国 アフリカ分割の政治経済学』新評論.

英語文献

- Johnson, Paul 1987. *Consolidated Gold Fields: A Centenary Portrait*. London: George Weidenfeld & Nicolson Limited.
- Jones, JDF. 1995. *Through Fortress and Rock: The Story of Gencor 1895–1995*. Johannesburg: Jonathan Ball Publishers.
- Lang, John 1986. *Bullion Johannesburg: Men, Mines and the Challenge of Conflict*. Johannesburg: Jonathan Ball Publishers.

(創価大学通信教育部助教授)